

「おめえどっから来た」と聞かっちゃんて「日本から来たんだが、お天道様へはまっど遠いのか」と聞いたら「おめえここをどごだと思ふ。ここは宵の明星だぞ、ここまで来んの何百日かがあったが知んにえが、こつから先を考えて見る。何百日も漕いで夜中の明星、そつから何百日も漕いで明けの明星、その次がお天道様だが途中で食い物はねい、残りどのくらいあつか」といわれて調べつと半分しか残っていいい。

「悪いことは言わねい、とてもお天道様までは行げねいが戻つたらどうだ」といわれ、あきらめて戻つたという話です。

田舎八幡

むかし、閑場に茂助という若者がいた。幼い頃より弓が好きで名人といわれていた。或るとき、庄屋にきた代官所のさむらいがそれをきいて、是非みたいと庄屋に話した。早速庄屋に呼ばれた茂助は弓を射ることになった。

庄屋の庭には弓の的場がつくられた茂助は、めどあき錢を五間先に的とした。

「おさむれさん錢のめどに命中させかんない」といって、弓に矢をつがい満月のように力をこめて放つた。茂助の云つたどおり矢はめどあき錢の真中に命中した。それを見たさむらいは「たいしたもんだ」とほめたそうだが、茂助はおさむらいに向つて、「こんなもんでねい。こんなこつてたまげねいでくんろえ。お

れが足もとにしろしをつけてくんちえ」といった。さむらいは、足もとにしろしをつけてどうするのかと尋ねたら、茂助は真暗らな夜でも足あとが同じなら命中させるといったので、さむらいはなおたまげた。

夜がきた。茂助は昼間足あとにしろしをつけたところに立つて弓矢を射た。さむらいは真暗な夜に「まさか」と思いながら、灯りで的をみたら、矢はめどの真中に命中したので、さむらいはまたまた、たまげたそうだ。

そのあと村人から茂助は「田舎八幡」と呼ばれたという。

ませ木をかけられた神馬

梅田部落に高村山竹林寺観音堂があつて、木像の神馬二頭が奉納されている。白い馬は兩年に晴天になるように観音さまにお使いにゆき、黒い馬は日照りの年に雨乞いにお使いにゆくことだった。

或る年春早い頃、八幡岳の峯に残雪が見え、畑の麦も青々と伸びてきた。

或る日の朝だった。部落の百姓、武兵衛が息を切らして家に帰る途中、喜助に出逢つた。

「喜助どん おらげの麦馬に喰わっちゃで」といったら、「馬が麦を喰つた。おかしてねいか、むらの馬は外には出ねいぞ」と喜助は言つた。